

「地域づくり」を見据えた日本語教室

山梨県地域日本語教育コーディネーター
学校法人 ユニタス日本語学校 金城 結衣

1. はじめに

山梨県では R2 年度から「山梨県地域日本語教育推進事業」がスタートし、今年度で 4 年目を迎えている。事業内容の一つとして、日本語でのコミュニケーションがうまくとれずに困っている外国人を対象に、継続的学習を通じて日本語能力の向上を図ることを目的とした「日本語モデル教室」の企画・運営があり、市町村と協力し、毎年 2 市町村ずつ日本語モデル教室を開催してきた。今年度は甲府市・上野原市・韮崎市の 3 市町村において日本語モデル教室を運営している。本報告では、このうち、上野原市日本語教室における実践について報告する。

2. 教室概要

1) 実践活動地域：上野原市日本語教室（R5 年度日本語モデル教室）

2) 教室形態

- ① 開催期間：2023 年 9 月～1 月 毎週日曜日 14：00～16：00 全 16 回
- ② レベル：基礎Ⅰクラス（A1）、基礎Ⅱクラス（A2）、対話交流クラス（B1 レベル以上）
- ③ 教室参加者の国籍：ベトナム（20 人）、中国（7 人）、インドネシア（5 人）、バングラデシュ（1 人）
- ④ クラス編成：B1 以上のレベルを対象とした対話クラス、A1、A2 レベルの基礎Ⅰ、Ⅱクラスの 3 レベル編成となっており、対話クラスにおいては地域住民であるパートナー（※学習支援者）との対話・協働を、基礎クラスにおいては行動中心アプローチを用いた日本語授業を行っている。

3. 課題背景と実践内容

課題 1 事業としてのビジョンが明確化されていない

① 課題背景

本事業における日本語モデル教室では、「日本語能力の向上」とともに、「つながり作り」を大きな柱としており、学習者が「自立した言語使用者」として、地域で生活していく上で必要となる日本語を身に付けることを目指している。しかし、「自立」とはどのような状態か、「つながり」を醸成するために必要なものとは何か、その 2 つが達成された先に何があるのか、事業としての方針が固められていない現状があった。

② 課題解決に向けた実践

総括コーディネーターを中心としたプログラム開発チームを組み、山梨県地域日本語教育としての理念・目標の共有、目標の構造化を行った。チーム全体で理念の解きほぐし、目標の組み立てを行うことにより、目指すべきビジョンが明確になり、現行カリキュラムについての新たな課題発見にもつながった。（課題 2）

課題 2 描いたビジョンとカリキュラムのギャップ

① 課題背景

課題 1 に取り組む中で、山梨県地域日本語教育推進事業における「自立した言語使用者」を以下のように位置づけた。

- a. 課題解決のために必要となる助けを求めることができ、助けを求められた場合に応じることが

できる

- b. 自分ごとで話せるようになる
- c. 相手の発言に対して、興味や共感を示しながら、双方向のコミュニケーションを成立させることができる

これらは「つながり」を醸成することにも深く結びついており、自分の中に生まれた価値観やことを他者に伝え、他者の興味・関心に心を寄せることが「安心感・居場所感」へとつながり、それを繰り返すことで「つながり」が生まれていくのではないだろうか。

しかし、現在、パートナーとつながりを醸成する場となるはずの対話クラスでは、お互いを深め合うという目的の“対話”がただのおしゃべりで終わってしまっているという現状があり、描いたビジョンと現実に大きなギャップがあった。

② 課題解決に向けた実践

教室に携わる教師陣でチームを組み、「つながり作り」を見据えたカリキュラム開発を行った。教室を社会実践の場と捉え、社会の中で他者とつながっていくことを見据え、基礎クラスでは「自己表現」「傾聴」の基盤づくり、対話クラスでは、教師やパートナーが教え、学習者が習う一方向ではなく、少しずつ自己開示をしながら、段階的に関係性を構築していく仕掛けを取り入れたカリキュラムを試行した。

4. 今後の課題

① 教室の通年化に向けて

現在では、週に1回、全16回の回数で教室を運営しているため、開催期間が4,5か月と短い期間になってしまっている。せっかく生まれたつながりの種が、根を生やさないまま終わりを迎えてしまっている。行政の予算上、教室の通年化はすぐには難しいかもしれないが、教室開催期間外に、学習者+パートナー主体の活動の場を作っていきたい。

② 参加者の継続率

今年度は教室スタート時と終了時で、教室参加者(学習者+パートナー)の大幅な減少が見られた。要因の一つとして、以下の二つが挙げられる。

- a. 開催時期：冬の訪れとともに参加人数が減った。上野原市は交通の便が悪く、学習者の交通手段は自転車か徒歩に限られる。そのため、気温の低下とともに、人数も減ってしまったのではないかと。
- b. 教室の名称：特に対話クラスの人数が減ってしまった。「教室」という名前でも募集をかけているため、参加目的に「文法の勉強」「JLPTの勉強」を挙げる学習者も多い。クラス分けの際に、対話クラスの目的・内容を伝えてはいるが、参加してみて「思っていたのと違った」と感じてしまったのではないかと。それぞれのニーズに応じていく方法を探るとともに、教室の名称についても考えていきたい。

5. おわりに

わたしたちが目指しているのは、多文化共生“教室”ではなく、多文化共生“社会”であり多様な価値観を認め合い、だれもが活躍できる教室をデザインするとともに、10年後、20年後に、わたしたちが住むこの地域が、そのような場になっているよう、まずは地域にしっかりと根を生やすこと、また、教室で生まれたつながりの輪を広げていくことが必要である。地域づくりを見据えた日本語教室を、教室に参加するみんなとともに作っていききたい。